

没後150年 管弦楽法 “ベルリオース” 第1回 の大家

プログラム

今年はフランスの大作作曲家ベルリオースの没後150年の記念の年に当たります。そこで3回シリーズでこの大作作曲家の芸術に迫りたいと思います。ベルリオースは「標題音楽」という新しいジャンルを確立し、伝統的な形式にとらわれない自由な作品を生み出しました。劇的で色彩的な管弦楽法は、多くの作曲家に影響を与えています。田舎町の医師であった父の長男として生まれたベルリオースは、18才の時に医学を学ぶためにパリにでますが、そこでグルックのオペラに感激し、音楽家になろうと志しを変え、パリ音楽院のル・シュール教授の教えを受けるようになります。ル・シュールの教えは音楽に劇的要素を取り込もうとするもので、ベルリオースの標題音楽の形成する上での大きな要素となりました。1827年パリでイギリスの劇団がシェークスピア劇を上演、その主演女優ハリエット・スミッソンに心を奪われた事が刺激となって創作力を掻き立てられ、のちの「幻想交響曲」を生み出す原動力にもなりました。ふたりは1833年に結婚するも、その後関係は次第に険悪なものとなって行きます。そんな時期(1834年から41年)に書かれた『夏の夜』はフランスロマン派の詩人、テオフィル・ゴーティエの詩集「死の喜劇」からの6篇に作曲したもので、ロマンティックな愛の様相が歌とオーケストラの見事な一体化により、鋭い感性で細やかに表現された傑作です。1839年に完成された『ロメオとジュリエット』はシェイクスピアの戯曲に基づいていますが、物語に沿ったものではなく、自由に情景を選んで劇的交響曲と名づけた、独唱、合唱と大管弦楽を伴った壮大な作品です。1844年作の序曲「ローマの謝肉祭」はもともと歌劇「ベンヴェヌート・チェルリーニ」の第2幕の序曲として作曲されましたが、後に演奏会用序曲として独立して演奏されるようになりました。主旋律にオペラの中の愛の二重唱や舞曲サルタレロがとられている名曲です。『イタリアのハロルド』はヴィオラ独奏を伴った交響曲で、バイロンの長編詩「チャイルド・ハロルドの巡礼」に着想を得て作曲され、1834年に完成。ハロルドの主題は独奏ヴィオラで表され、固定楽想として全曲を一貫しています。地味ながらベルリオースの優れたオーケストレーションを堪能できる名曲です。

エクトル・ベルリオース (1803~1869):

歌曲集 “夏の夜” op.7

第1曲 ヴィラネル／第2曲 ぼらの精／第3曲 入り江のほとり（哀悼の歌）

第4曲 君なくて／第6曲 未知の島（第5曲 墓地にて（月の光）割愛）

バーバラ・ヘンドリックス（ソプラノ）

ネヴィル・マリナー指揮アカデミー室内管弦楽団

（1996.9.7 ルツェルン、クンストハウスでのLive）

劇的交響曲 “ロメオとジュリエット” op.17~

第1部 序奏／詩節（ストロフ）／第2部 音楽会と舞踏会

第3部 愛の場面／第4部 愛の妖精の女王マフ／終曲のフィナーレ

オリガ・ボロディナ（ソプラノ…ジュリエット）／トマス・モーサー（テノール…ロメオ）

アラスティア・マイルス（バス…ロランズ神父）

コリン・デイヴィス指揮ウィーン・フィルモニー管弦楽団／バイエルン放送合唱団

（1993.6.7 ウィーン・コンツェルトハウス大ホールでのLive）

*** 休憩 ***

エクトル・ベルリオース (1803~1869):

序曲 “ローマの謝肉祭” op.9

ヴォルフガング・サヴァリツシュ指揮フィラデルフィア管弦楽団

（1993.5.18 サントリーホールでのLive）

交響曲 “イタリアのハロルド” op.16~第1楽章、第3楽章、第4楽章

タベア・ツインマーマン（ヴィオラ）

クリストフ・エッシエンバッツハ指揮パリ管弦楽団

（2001.2 パリ、サル・プレイエルでのLive）